

令和八年度入学試験問題(教育学部／法学部／経済学部 経済・経営学科)

現代の国語
言語文化
論理国語
文学国語

(注意事項)

- 一、問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は十八ページ、解答紙は四枚あります。「始め」の合図があったらそれぞれを確認すること。
- 三、各解答紙の二箇所受験番号を記入すること。
- 四、受験番号は、裏面の記入例にならって、マス目の中に丁寧に記入すること。
- 五、解答はすべて解答紙の指定欄に記入すること。

補足説明

令和八年度入学試験問題（教育学部／法学部／経済学部 経済・経営学科）

現代の国語
言語文化
論理国語
文学国語

大問二 7ページ傍線部A 「宙吊り」は「ちゅうづり」と読む。

現代の国語
言語文化
理論
国語学

— 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(60点)

(野口雅弘『中立とは何か マックス・ウェーバー「価値自由」から考える現代日本』による。
ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。)

(注) 信条倫理と責任倫理——ウェーバーによると、信条倫理は自分が信じるままに行動し、結果を顧みずとその責任を社会や神に帰す態度であるのに対し、責任倫理は行為の結果を予見し、結果の責任を他者に転嫁することなく自らが負おうとする態度。

wertfrei——「価値自由」のドイツ語表記。

シンギュラリティーズの時代——大量生産と官僚制を特徴とした近代に対して、現代は個人が比較不可能な、個性によって特徴づけられる時代になっているという意味。

問1 傍線部A「対立の契機が社会から丁寧に取り除かれてきた」とあるが、本文中でその具体例を述べている箇所を一〇〇字程度で抜き出し、その最初と最後の「〇」字を答えなさい(句読点を含む)。

問2 空欄 X には、朝井リョウの小説『死にがいを求めて生きているの』の引用文が入る。その引用文として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 良く言えば治外法権的な、包み隠さず言えば浮いた存在
- (イ) 他者貢献でも自己実現でもなく、自分自身のための生命維持装置としてのみ、存在する人
- (ウ) 何もないところに無理やり対立を生んで、やっと、自分の存在を感じられる子
- (エ) この世の対立の源を殲滅せんめつさせるための戦士
- (オ) 対象自身ではなく、対象の背景によって、自分の立ち位置を決める人

問3 傍線部B「対立を回避し、政治的に中立であろうとすることは、すでに政治的な態度である」とあるが、なぜ「対立を回避し、政治的に中立であろうとすること」が「政治的な態度」と言えるのか、その理由を説明しなさい。

問 4 傍線部C「マックス・ウェーバーの価値自由」とはどのような考えか、本文全体の論旨を踏まえて説明しなさい。

問 5 傍線部D「とても仲のよい誰かとは異なる社会を自分は望んでいる、という事実の辛さに耐えること。」とあるが、なぜそのような「辛さに耐える」必要があるのか、その理由を説明しなさい。

問 6 傍線部E「現代の政治教育の問題のいくつかが党派性をうまく扱えないことに由来している」とあるが、うまく扱えない「党派性」とは何か、「党派性」の意味を明確にしつつ、本文で言及された以外の具体例を一つ挙げて、説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(60点)

(星野太『美学のプラクティス』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。)

問1 傍線部A「たえずおのれを宙吊りにしながら思索を続けることを常態としている」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問2 傍線部B「こうしたパラドクス」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問3 傍線部C「こうした美学における「居心地の悪さ」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問4 傍線部D「こうしたステレオタイプに抗する方法として、いったいどのような戦略が考えられるのか」とあるが、ここでの「ステレオタイプ」とそれに抗する「戦略」とはどのようなものか、本文全体の論旨を踏まえて説明しなさい。

問5 傍線部E「美学に対するこうした批判は構造的に不可避である」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問6 傍線部F「美学が「不純な」領域であることをいったん引き受けたうえで、それがもつ政治的な批判力を最大限に高く見積もる」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(40点)

ふるき人の語らく、むかし安倍貞任・宗任といふもの叛ける時、^①源頼義朝臣、軍の君として陸奥に下り給ひぬ。従ふ人多かる中に、近江のつはもの日置九郎が馬のかざり、その身のよそひ、言ふばかりなくうるはしうて出たるを、人みな褒めたたへしに、朝臣は御気色あしうて見え給へれば、九郎いぶかりながら、興なげに御前を退きぬ。

明くる日、使を給ひて、「かの鎧は忌はしう見ゆめり。そこに持たらんには、身を失ふこと遠からじ。とく売り捨てぬ。されど、こなたざまにあらんは、なほ良からず。よすがもとめ出で敵のものにせよ」となん、^②ねもごろに聞こえ給ひければ、九郎「つつしみて受け賜げりぬ」とて、又ことなる鎧の、色あひ・為様同じきを着て出たり。朝臣、「なほ先の日の物なりや。さしもいましめつる物を」とむつかりて仰せ賜びたり。「いな、そは仰せのままに着侍らず。こはこと物なり」と申す。「さかし。されどなほ忌々しう見ゆ。こも先のごとせよ」となん宣びたれば、後の日は引きかへて、黒き革をもて作りて、見立なく、いといと古びたるを着たりけるに、「それこそめでたうは見ゆれ」と褒め給ひぬ。

後に九郎、「その忌はしきかたちを、つばらに伝へ給ひぬ」と申す時に、「いな、物の具に身を失ふべき姿とてはなけれど、よしなきことに宝をつひやし、うるはしだちてものするは、国のおとろへとなりぬべし。若き者らは、こをよきことに思ひ、うらやみてまねばんには、年ごとのなりはひ足らで、家貧しうなりもて行きつつ、よき従者をも養ふべき手力なからまし。さてぞ敵にむかひて滅びやすかんなり」と教へ給ひければ、人みな身にしみておほえけりや。

ただ、鎧は札よきがよかんなり。弓は返らずともその力にかなひ、太刀・長刀は金よく鍛ひて、物の骨切るるを是とせん。馬は丈劣るとも、遠きに疲れず、癖なく、いちはやう手縄に従ふを選ぶべし。はた、大かた物の具のきらきらしきは、敵まづ眼につけてかかるほどに、思はず身をも失ふべかんめり。

(伴蒿蹊「訳文章童諭」)

- (注) ○こなたさま……味方。 ○為様……仕立てかた。 ○さかし……そうであるか。 ○見立なく……見映えのしない。
○物の具……武器。とくに鎧。 ○なりはひ足らで……家計が追いつかず。 ○手力……腕力。ここでは財力の意。
○札……鎧の材料となるもの。 ○弓は返らずとも……矢を射たときに、その余勢で弓が回転しなくても。
○金……金属部分。 ○手縄……馬の轡くちにつけて引くための縄。

問 1 傍線部①②を現代語訳せよ。

問 2 傍線部 X・Y を、例にならって文法的に説明せよ。

〈例〉過去の助動詞「き」の連体形

問 3 傍線部 A「これはこと物なり」とあるが、頼義はどのような指摘をし、それに対して九郎はどのように答えたのか。文脈に即して説明せよ。

問 4 傍線部 B「それこそめでたうは見ゆれ」とあるが、このように頼義が言ったのはなぜか。九郎の出で立ちが、味方にどのような影響をもたらすと考えていたかに留意しながら説明せよ。

問 5 最終段落において、

ア、武器や馬を選ぶとき、どのような点に気をつけるべきと言っているか。簡潔に答えよ。

イ、なぜその点に気をつけるべきと言っているのか。本文に即して答えよ。

四

江戸時代、天明八年の京都での火事について記した次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で返り点、送り仮名を省いたところがある。(40点)

京師戊申火、十万家一時灰燼。繪賈某染疫大熱、不諳人事。火逼、家人周章、納某櫝、舁送野外、歸再運貨物、無守櫝者。有儉兒至、欲啓之、為其加鍵、因以斧碎蓋。見中有人、大駭逸去。某聞響驚醒、拳頭一望、猛焰焦天、黑煙四散。又聞萬人号慟、声大懼念、^②「既死來地獄。鬼卒已破棺去。恐復來」^①。挫去。勉強出櫝。隱隱見林際燈光、似是仏灯。蹙蹙以就之。則一堂宇、見上坐閻王、氣象威猛。^③乃匍伏階下曰、「某生前無大過、願度極樂。」王擲目、不發一語。^④益怖祈命。傍有老叟

亦避_レ火者_一。謂_{ヒテ}曰、「君顛_{くる}乎_{フカト}。」^④因語以_ニ夜来大燒事_一。此時某汗流_レ
熱除_{、カレ}、神氣涼爽_{。タリ}。夜亦向_フ曙_ニ。拭_{ぬぐヒテ}眼諦視_{スレバ}、則千本閻魔堂也。
始_{メテ}知家人以_レ臥_{セルヲ}病_ニ、昇_{かつギ}出_{ダシテ}而到_ル之_ニ。鬼卒即偷見也。^⑤

(寺崎_{れい}蛸洲『蛸洲餘珠』による)

(注)

- 灰燼 || ものが焼けてなくなる。
繪買 || 絹織物の商人。
周章 || あわて、うろたえる。
積 || 大型の箱。
偷児 || どろぼう。
逸去 || 走って逃げ去る。
号慟 || 大声で泣き叫ぶ。
鬼卒 || 地獄の役人、看守。
拵去 || つかまえて、つれていく。
勉強 || むりやりに。
蹙躰 || 腹ばいではって進む。
堂宇 || 寺社の大きな建物。
閻王 || 地獄を司る王、閻魔大王。
気象 || 風格、心意気。
匍伏 || ひれ伏す。
度 || 悟りの世界に達する。
獐目 || 凶悪な目つき。
老叟 || 老人。
顛 || 気が狂う。
神氣 || 精神。
諦視 || 注意してよく見る。
千本閻魔堂 || 本尊に閻魔大王を祀った寺院。

問 1 傍線部①「大駭逸去。」について、誰がなぜそのようにしたのか。主語を明らかにしてわかりやすく説明せよ。

問 2 傍線部②「既死来地獄。」について、繪買の某はなぜそう思ったのか。わかりやすく説明せよ。

問 3 傍線部③「傍有老叟亦避火者。」を、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ（現代仮名づかいでもよい）。

問 4 傍線部④「因語以夜来大燒事。」を、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ（現代仮名づかいでもよい）。

問 5 傍線部⑤「始知」について、何を始めて知ったのか、その内容として最もふさわしいものを、次の選択肢（ア）～（エ）から選べ。

（ア） 商人は家人によって担ぎ出されて、自宅の火災から逃れたが、箱に鍵がかかっていたため出ることができずに、けっきょく焼死して地獄に落ちたこと。

（イ） 強欲な商人は、火事のとときに自宅の財貨を取りに戻ったため、地獄の役人によって箱に入れて連れ去られ、地獄の閻魔大王の前で命乞いをしたこと。

（ウ） 病気で臥していた家人が、火災の現場では盗賊の力をも借りて、箱に入れて連れ出され、無事に救われて極楽に行くことができたこと。

（エ） 病気の商人が、箱に入れられて安全な場所まで運び出され、箱を壊されて脱出することができたのは、盗人のしわざであったこと。

問 6 波線部①「已」、②「復」、③「乃」、④「益」の読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記せ（現代仮名づかいでもよい）。

